勇者と魔術師のぶらり世界旅行

リン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
勇者と魔術師のぶらり世界旅行

【Ｎコード】
Ｎ１４７６Ｚ

【作者名】
リン

【あらすじ】
魔王を倒し、世界を救った勇者と魔術師の話。それはもはや伝説と化していた。が、実は本当の話だった！これは、とある事情から世界中に散らばる呪われたアイテムと呼ばれる代物を回収する羽目になった、勇者の末裔である王女アイリーンと、魔術師の末裔である青年ハルが繰り広げる道中記です！

酒場での一幕

「眠り姫〜！？」
街での噂話やもめごとを聞くなら、夜の酒場が一番情報が集中する。
と、いうわけで、あたしたちはいつものように酒盛りをしながら、目的の情報をさがしていたんだけど。
酒場のマスターから聞いた話は、子供でも知っているおとぎ話「眠り姫」の話だった。

「なぁ、眠り姫って、あの有名なおとぎ話だろ？そのモチーフになったお城が、この先の森にあるっていうのか？」

相方のハルが、やたらきらきらした目でカウンターから身を乗り出す。
…こいつのことだから、たぶんろくなこと考えていない。どうせ、
「そんな伝説の姫を一目見たい！」
とか、「あわよくば……」ってとこだろう。なんせ彼は筋金入りの女好きだ。

「やっぱり美人なんだよな？美人だよな！？で、どこにあんだよその城！？」
「い、いやぁ、どこっていうか、その森の奥深くに」
「奥深く、って、それじゃああんまりわかんないだろう？地図とかないのかよ、地図！？」
「それが城は確かにあるらしいんだが、そこまで辿り着けないらしいというか」
マスターがあまりのハルの剣幕におされている。そして、ハルのほ

うはというとますますヒートアップしている。

「やれやれ」

もうマスターにつかみかからん勢いだ。こうなると、ハルは止まらない。あたしは今まで飲んでいたワインを下に置き、腰にある剣に手をかける。そして。

「少し落ち着いて」

「ぐぅぅえ――――――――っ！！！」

あたしに横腹を剣の柄で殴られ、思わずカウンターに沈み込むハル。こうするとしばらく静かになる。

「ごめんなさい、連れがやかましくて。これでしばらくは再起不能なんで」

「い、いや、再起不能って…。あんた、今何したの？」

「いえ何、ちょっとお灸を据えただけです。それより」

そう、今はこんな屍のことはどうだっていい。問題はさっき二人が話していた会話の中身だ。

「さっき、お城は見えるけど辿り着けないって、言ってましたよね。それってどういうことなんですか？何か魔法がかかってる、とか？」

「うん、どうやらそうらしい。街の若い連中とか旅のもんとかが、やっぱり物珍しさで森に入るんだけど、なにか透明な壁みたいなものに阻まれて、それ以上進めないんだと」

なるほど、魔法の結界か。

「でもさ、もう３００年も前の魔法でしょ？強力な魔法使いにならその術、もう解けるんじゃないの？」

そう、確かにこの世界には、強力な魔法というものが存在する。でも、時間が経てばさすがの強力魔法も劣化し、脆くなるはず、だ。でもマスターはあたしの問いに、首を横に振った。

「それが、どうもだめみたいなんだよ。ついこの前も、有名な魔法使いモナステ様が来たんだが、さっぱりだったみたいだな」

魔法使いモナステ、とは、この世界の１０代魔法使いに数えられる一人で、魔力も魔術も決して
申し分ない。そんな人がだめだとは…。

「……こりゃあひょっとするとひょっとするかな」

「？何か言ったか？」

「ああ、何でもないです。独り言ですよ」

これは明日さっそく調査しに行かないといけない。と、いう訳で、あたしはもっと詳しい話を聞くべく、色んな人に聞きまわることにしたのだった。

あ、ちなみにハルはつつきどころが悪かったのか、そのまま目を覚まさなかった。

眠り姫に会いに…（1）

翌朝。
うっそうと木が生い茂る森の中に、あたしたちはいた。
昨日酒場で収穫した情報を確かめに森に入ったのだ。善は急げってことで早速。森の中は静寂に満ちていて、誰をも寄せ付けない神聖な空気が満ちていた。この先に魔法によって眠らされた運命の姫が眠るという場所に、まさにぴったりの森。
が。そんなもんはお構いなしとばかりに、あたしたちはずんずん進んでいく。
そして、男のほうはやけに不機嫌だった。
「まったく、ひどいよなお前は。仲間の腹を殴ったうえ、部屋に運ぶのが面倒だからって、外に放り出すんだもん。誰もいない孤独な空の下、俺は一人寒さに打ちひしがれ…。しかもカギも持ってなかったから部屋にも戻れず…。あ――――っ、俺ってかわいそう！！！」
そう言うと、やたら芝居がかった動きで髪をかき上げる。けど、あたしはそんな相方の様子をしれっとした表情で眺めていた。
確かに、彼が今言ったことは事実だ。気絶したハルを、まだ6月だとはいえ薄寒い星空のもとへと放り出した。が。あたしは知っていた。彼が目を覚ました後、どこに行ったのかを。
「へぇ？孤独な空の下、ねぇ？寒さに打ちひしがれ、ねぇ？」

意味ありげにあたしはハルのほうをちらりと見やる。するとハルは、びくっと体を震わせた。

「え、え？何さその顔は。まるで、俺が悪いみたいなそんな」

「そもそも！あんたが話の途中で勝手にヒートアップして！！情報収集の邪魔をするからいけないんでしょう！？それに、あんたが目覚めた後どうしたか、あたしが知らないとでも思ってるの？」

あの酒場兼宿屋のお客は、宿屋の合鍵を渡される。つまり、例え外に放り出されても、あたしたちの部屋までは入れなくても、少なくともそのカギを使えば中には入ってこれる。

しかし、目を覚ました後の彼の行動は…。

「あんた、あたしが近くにいないのをいいことに、また女の子を捕まえにふらふら街をさまよってたでしょう」

すると、ハルは一歩後ずさり、驚愕の表情を浮かべた。

「ななな、なぜそれを！！！まさかお前、あんとき見てたのか！？」

「んなわけないでしょう。寝てたわよ夜なんだし。ただ、朝目が覚めて外を見たら、あんたがかわいいいいいい女の子といちゃいちゃしながら宿に帰ってきてたからね」

そう言うと、あたしは深いため息をついた。

「まあ確かに、今回はあたしもやりすぎたかなとは思ったけど。目を覚まさなかったし、ほんとうにヤッチャッタかな、とも思ったけどね。で・も、そもそもあんたの異常なまでの女好きが原因なわけだし、少しは反省しなさいよね」

全く、彼の女好きは筋金入りだ。街に着けばとりあえず手当たり次第にナンパをし、朝になるまで帰ってこないこともざらだ。

これでハルがブ男ならあまり問題はないが、とにかく彼は目立つ容姿をしていた。

真っ赤に燃えるような赤い髪と瞳。人間離れした美しく、精悍な顔立ち。それなりに鍛え上げた体格。そんな奴に口説かれたら、確かに女の子はころっとおちる。そりゃあもう簡単に。

「とにかく、女の子と遊ぶのもほどほどにしときなさいよ。この前みたいなことはもうごめんだからね」

この前、とは、この街の前に立ち寄った場所でのこと。ハルがナンパした女の子が、あまりに彼のことを溺愛しすぎて、旅についてくると言い出したのだ。もちろんそれはできないと何度言っても彼女は聞かず、追いかけてきたので、仕方なしに全速力で走って振り切ってきたのだ。その時の彼女の執念といったら…。彼の仲間だというだけで、あたしはその子に陰湿ないじめ（ご飯の中に虫が入っていたり、トイレに閉じ込められたり、とにかくくだらないこと）にあい苦労したのだ。

「分かってるって。だから今回は、ちゃんと後腐れないように遊んだからさ」

そういう問題なのだろうか…。この態度を見る限り、今までの態度を改める気は全くないらしい。

「んで、さ。そろそろ着くころだと思うぜ、その、姫の眠る城ってのにさ」

さっきまであんなにあたしに恨みがましい目線を送ってたのに。昨夜聞いたおとぎ話の姫に早く会いたいとばかりに、彼は嬉しそうにそう言った。心なしか、早足が更に早足になっている。少し遅れをとったあたしはそれに呆れつつも、彼の後を追う。

「はぁ。まあいいや。どうせあんたの女の子大好き病が治るはずないし。…んで、あんたがそういうってことは、魔力、感じるのね？」

あたしがハルにこう聞くと、

「ああ。このあたり一帯に、びんびん感じるね」

ハルはにやりと笑みを浮かべた。

お城は何百年もたった今でも力の衰えない強力な魔法により封じられている。魔力を感知する能力を持つハルは、その魔力の強さと大体の魔法の位置を感じ取ることができるのだ。

逆にあたしは全く魔力を感じることができないので（魔法も全く使えないし）、こういう時はハルに頼るしかない。

「俺の予想だと…この先に魔力の壁があるはずだ。城とこの森を隔てる魔法がな」

そして彼はまっすぐ先を指さす。その先は更に暗く、見る者を不安にさせる。だが不安がっている場合ではない。ハルがそう言うなら、その先に目的のものがあるはず。それに、いかにもなにかあります、という感じがぷんぷんしている。

やがて件の城を目指すべく、その暗い先へと足を踏み入れるとそこ

には。

「……わぁお」

「これが伝説の……」

目の前に広がっていた景色は、まさしくあたしたちが予想していた通りのものだった。

そこに足を踏み入れると、まず最初にぱっと視界が開けた。今まで周りを覆っていた木々は消え、代わりに眼下に現れたの探し求めていた大きな大きな城だった。

もとは美しいお城だったのだろう。噂によると、３００年前、城が封じられる前は、美しき白亜の城として周りに名をはせていたらしい。しかし今は見るも無残な姿だった。

建物のうちのいくつかは崩れ落ち、地面にその残骸が転がっている。白い壁ははがれおち、茶色い土がむき出しの部分も多い。城の周りは細い蔦で覆われており、今やその美しき面影はない。かろうじてお城であったもの、と分かる、廃墟に近い感じだった。

「こりゃあひどいわね」

「まあ、３００年も経てばとっくに耐久年数は過ぎてるし。それでもなんとか形を保ってるのは、封印のお陰かもな」

「おまけになんか城の周りだけ暗いし、これでカラスかコウモリでも飛んでたらある意味完璧だったかもね」

「廃墟」という意味では確かにそうかもしれない。横でハルがうんうんと頷いた。

「で。問題はここからね」

あたしはそう言うと、隣のハルに顔を向ける。

「どう？魔力の壁はあるの？」

すると彼はお城に向かって一直線に歩く。歩く。歩く。だが、ある一線のところから、彼は全く前に進めず、その場で足踏みをしている状態になった。次にハルは自分の手を前にかざす。すると何か固いものにあたったようで、こぶしで叩くとコンコンとう音がした。

「おう、あるある。えらく固い見えない壁だよ。強い魔力と複雑な術で構成された、れっきとした高位魔法の封印だなこりゃあ」

「高位魔法」とは、昔使われていた魔法のことで、今やその使い手はごく限られた実力ある魔法使いや、ドラゴンなどの種族のみである。

この高位魔法は、使えばすさまじい力を発揮するが、術が難しく、また魔力も大量に消費するため、使い手が限られている。今巷で使われているのは、それを簡略化した魔法で、術も簡単で魔力の消費も少ないため、ほぼすべての人間が使うことができる。

「この高位魔法の術式と魔力の量が半端ないな。こりゃあとてもじゃないけどただの人間が作り出せる代物じゃない。ただまあ、例のアレがあれば話は別だ」

ハルはそう言うと、にやりと笑った。

「おそらく俺たちの探し物はこの中にあるはずだ。この魔力の結界を壊し、姫の眠りを解けば解決だ」

しかし、３００年もの間誰にも解けなかった封印である。そうやすやすと事が運ぶはずがない。だけどあたしたちの顔は確信に満ちていた。

あたしは静かにその手を右の剣にかける。そしてゆっくりと、鞘から己の剣を抜く。

それは刃こぼれ一つない、美しい銀色の刃をしていた。森の中のわずかな太陽光を浴び、きらきら輝く刃。その下にある柄には鮮やかな緑色の宝玉が埋め込まれている。また鍔には、繊細で複雑な装飾がなされていた。一目見れば、それが美しく高価なものであると分かる。だがそれは、ただ美しいだけではなかった。その剣の纏う空気には、若干の邪気と禍々しさが含まれていた。

「相変わらず不気味なオーラを放ってるなー」

ハルが苦笑しながらあたしの持つ剣を見つめる。

「まあ、呪われた魔剣だから仕方ないんじゃない？」

人が手にすると、絶大な力を与える代わりにその者の魂を喰らいつくす…。それがあたしの持つ剣である。けどそんな剣を手にしてもあたしはいたって平然。

そして何食わぬ顔で結界の前まで向かうと、剣を上に構えた。

いままでどんなことをしても破れなかった結界。だけどそれがどうした。んなもん、この剣の前では無力に等しい。

「さあて、じゃあ行くわよ」

そう言うと、あたしは魔剣で結界を思いっきり斬りつけた！

眠り姫に会いに…（2）

「しっかし…あれだな。今にも崩れそうな感じだな」
「眠り姫の時間以外は止まっていないのね」

今あたしたちは、結界の破られた城の中を進んでいた。遠くから見た以上に中は老朽化が進んでおり、時々歩くたびにみしりと音が鳴るほどだ。城の中は暗く、光も届かないため、ハルが己の手の中に作り出した魔法の火を頼りに上を目指している。

「それにしても、３００年も破られなかった結界がこうもあっさりと…。なんか、破り甲斐がないっていうか、面白くないっていうか」
「簡単にいくのにこしたことはないでしょう！」

あたしが剣で結界に斬りつけた後。予想通りパリーンと透明の何かが砕けた音がして。それっきりだった。後は、今まで結界なんてありませんでしたよ～といわんばかりに、あたりからは怪しげな魔法の気配は消え、先に進めることになったのだ。

「言っとくけど、お城に入るための結界は解いたけど、その元となったこのお城の姫の魔法はまだなんだからね」
「そうそう！俺としては、その眠り姫の眠りを覚ますのが楽しみでここに来たといっても過言ではない！からな♪」

そう言うと、ハルはでれんとした表情になった。あたしはその顔を見ると、深いため息をつく。彼の女の子への欲望は、限りなく深く、重い。

「ちょっと。趣旨が違ってきてるんだけど。あたしたちの目的は、

お姫様を眠らせて、なおかつこの場所への結界を作り出した強力な魔法の正体を突き止めて、それを回収することでしょう！？」
「わかってるわかってるよ。でもその過程の中に、姫様の眠りの魔法を解く、って作業も入ってるだろ？」
確かに、姫の魔法を解かなければ回収もできない。が。
「古今東西中世から現世来世まで、美しく呪われた姫の眠りを解くのは助けに来た男の熱い口付けって話だ。さあ、今行くからね。待っててね、俺のかわいいお姫様～」
彼を見る限り、絶対わかっていない。そう確信するあたし。
「るんららん～♪俺のぉ～かわいいお姫様♪らんたったー、今～会いにいきますぅ～よお、ランラン♪」
のんきに、鼻歌歌いながら階段でスキップしていやがる。やっぱり分かってない。
「君のぉ～、唇は僕のもの、さぁ――――♪」
分かっていない。この緩みきった締りのない顔、完全に今日の目的を履き違えてる。あんまりうっとおしいから、思わず階段から突き落としたくなる。が、我慢我慢我…。
「ｗｏｗｗｏｗいぇ～」
「だぁーっ、うっとおしい！！！」
思わず、あたしはハルに回し蹴りをする。気付けばハルは、叫び声を残しながらはるか階段の彼方へと吸い込まれていった。途端にあ

たりは真っ暗になる。

…いやあ、我慢が数秒と持たなかった。そして自分でもまさか、あんなにきれいに蹴りがヒットするとも思わなかった。なんか骨が砕けるようないい音もしたし、さっきの落ちっぷりもなかなかのもんだったし、ハルの奴、大丈夫だろうか。

なぁんて思っていると、誰かが上めがけてすさまじいスピードで駆け上がってくる気配がした。そして、ぜぇぜぇ言いながら、黒い塊があたしに詰め寄ってくる。

「お、お前、いきなし何するんだよっ！？なんかメリッとか言ってたし、すっげ痛かったぞ！！苦労して登ってきたのに一番下まで吹っ飛ばされるし」

ああこの声。やっぱりハルだ。

「やかましい！あんたが本来の目的を完全に忘れてふわふわしてるから、いらっとしてちょびっと強めに蹴っただけでしょう！？そんぐらい、あんたなら平気でしょう？そんなことより、早く火つけなおしてよね。暗いから、あんまり足元がよく見えないじゃない」

「お前がいきなり落とすからだろうがっ！？」

「しょうがないじゃない！！気付けば体が先に動いてたんだから！！！」

そう、あたしは悪くない。絶対に悪くない。いらっとさせるようなこの男が悪い。

するとハルはため息をつきながら、しぶしぶといった感じで火をつける。

「…ったく、なんで俺様がこんな目に……」

どうやら今のやり取りに納得いっていないらしい。直接あたしに抗議するのが怖いのか、小さい声でぶつくさ言ってる。

「なんか言った！？」

「いいえ―、なんにも言ってねえよ！！それより、さっさと進もうぜ。いい加減、この長い階段を抜け出したいしな」

あんたのせいで時間がかかってるんだよ！？…というツッコミをすると更に長くなりそうなので、あたしはもう何も言わない。ハルの作り出した光を頼りに、あたしたちは城の頂上を目指して進み始めたのだった。

眠り姫に会いに…（3）

どのくらい時間が経ったのだろう。なんかもう、永遠とも思える時間、果てしなく登り続けているような気がする。

「はぁ、はぁ、はぁ。…ちょっと、どんだけ、昇らせる気、なのよ、この、階段は」

「…お、俺に、聞く、な、よ！」

かれこれ小一時間は足を動かし続けているような気がする。もうくたくただ。というか、この単調な脚を動かすっていう作業にも飽きてきた。正直なところ。それは我が相棒も一緒のようだ。

「やっべ、ちょ、ちょっと休もうぜ。いい加減、疲れたんだけど」

「そう、ね。休憩しましょうか」

ハルの提案に是も非もなく賛同し、あたしたちはその場に崩れ落ちるように腰を下ろす。

「あ―、疲れたぜ」

最初の頃のハイテンションは、彼にはもうないようだ。そのままぐでーっと体を後ろに倒す。

「なんか、あれね。暗くて周りもよく見えないし、景色も変わらないから余計に単調よね」

そう、あたしたちの唯一の頼りは、ハルの作りだす小さな灯だけなのだ。

「にしてもよ、一体どんだけ上にてっぺんがあるんだ？」
「確かに。でもお城の大きさも、外から見たらかなりのもんだったわよね？普通のものよりも巨大っていうか…」
「ああ。こんだけ昇っても先が見えないっていうことは、想像以上に大きなお城だってことだろうよ」

でも。それでも。
確かに足場は暗くて悪いし、先は見えない。これだけ昇っても辿り着かないぐらい、高いお城なのかもしれない。だけど小一時間昇っても終着点が見えないっていうのは…。何かが引っかかる。そんな、３００メートルも４００メートルもあるようには見えなかったんだけど。

「ああ、早く俺の愛しの眠り姫ちゃんに会いたいっていうのによぉ。だがしかしっ！！焦らされれば焦らされた分だけ、会えた時の感動はまた一塩ってもんだよなぁ♪こう、なんていうの？俺の気持ちが盛り上がる、的な？」

体をくねくねさせながら、上気した顔でうっとりあらぬ方向に視線をやるハル。はっきり言って気持ち悪いが、あたしはあえて無視する。そんな気色悪いハルのことよりも。なんかこう、もう少しで頭がすっきりするような…。

ここは、例のものが封印されているであろうお城だ。それは、結界の強さが物語っている。城には入れないようにしっかりと強力な封印が施されてあった入り口。でも果たして、それだけなんだろうか、お城の封印は。たったそれだけ…？封印はまだあるんじゃないのか？昇り続けても終わりの見えない階段。階段。

と。あたしの頭の中に、ある一つの可能性がよぎった。

もしかして……。

あたしはその場に立ちあがると、ゆっくりと剣を抜く。

「そう、そして目覚めた姫と俺は、３００年という永き時を経てこの世で出会えた奇跡に感謝しながら、もう一度、今度はさっきよりも熱い、長い口付けを……って、をい！！！なんでいきなり剣抜いてんの！？ちょっと待て、ちょっと待てって！！！！！」

もしそうなら、これで長い階段の謎は解けるはず！

「待て、待て、落ち着け！？悪かった！！俺の妄想がヒートアップしすぎて、お前の癇に障ったのなら謝るから！！許してくれ…って聞けよ人の話を！？頼むからおい！！ギャ――――、やめてくれ！！剣は当たると痛いんだからな！！振り下ろすなぁぁぁぁっ！！！！！」

あたしは思い切り、その場で剣を振り下ろした。

「死ぬ、死ぬ、まじで今度こそ本当に死ぬぅぅぅ……、って、あれ？俺、生きてる。しかもどこも痛くない」

ハルが慌てて自分の体に傷がないか確認する。傷がないのは当たり前だ。別にあたしは、うっとおしいハルを切り刻むために剣を抜いた訳じゃない（本当に切り刻んでやってもいぐらいうっとおしかったけど）。ただ、この空間に剣で切りつけただけ。何もない空間を切っただけだ。

「やっぱり、思った通りね」
「ふぅ、冷や汗かいたぜ。おい、いきなり何してんだよ……」
ハルのあたしへの声が、途中でとまる。どうやらこいつも気が付いたみたいだ。あたしが何をしたのか。なぜ剣を抜いたのか。そして、何を切ったのかを。
「…なるほど、そういうことかよ」
ただの何もない暗闇を切ったはずだった。でも、そこには確かに、何か手応えがあったのだ。そう、あの時、結界を切ったときのように。
なんてことはない。城の外に結界があったように、城の中にも結界が施されていたのだ。眠り姫のところへ辿り着かせないための、見えない結界が。その証拠に、周りの景色が変わった。
さっきまで一筋の光も届かない暗闇だったのに、ほのかに、突然出現した窓から光が差し込んできていた。おかげで、先の道がよく見える。階段の終着点は、目と鼻の先にあった。
「つまり俺たちは、例のやつが作りだした暗闇のなか、同じ階段を永遠と足踏みしていた訳か」
「そういうこと。…にしたって、ハル。あんた優秀な魔法使いなんでしょう？この魔法に気付かなかったの？」
そう、こいつがさっさとこの魔法に気づいていれば、永遠と階段を上り続けるという体力も精神力も時間も存分に消費することはなかった。するとハルは悪びれた様子もなく、しれっと、

「さっきと違って、ここはもうやつのテリトリー内。つまり、そこら一帯に強力な魔法の気配がしている。そんななかでこの結界を見つけ出すのは無理な話さ。いくら俺が世界で右に並ぶ者がいないほどの史上最強の魔法使いでもな」
「はいはい。つまり役立たずってことね」
「おい、それは聞き捨てならないぞ！？」
「実際、あたしが気付いたからこの状況が打破できたんでしょが。あんたが一体何してくれたっていうのよ」
「さあ、ゴールは見えた！！いざ行こうではないか！！姫の待つ部屋へ！！」

あ、話、すり替えやがった。

「ま、いっか」

とにかく、例のぶつが（ハル流に言うと姫が待つ部屋）あるのはすぐそこだ。あたしたちは残り短い階段を一気に駆け上がった。

眠り姫に会いに…（4）

姫のいる部屋がいる場所はすぐに分かった。なんてったって、階段の先にあったのは、大きな扉のある部屋が一つだけ。ここに目的のものがあるのは、すぐに分かる。

「さあ、行くぞ」

緊張した面持ちで、今にも朽ち果てそうな扉のノブに触れるハル。ゆっくりとノブを回し、前の方へ押すと、ギーッという軋んだ音を立てながら扉が開いてゆく。

どうやらここにはもう、何の魔法もかかっていないみたいだ。

扉を開けきり、慎重に中へ入ると、まず目についたのが大きなベッド。

曇った窓ガラスから降り注ぐ濁った光が、ふりふりピンクの天蓋のついた、いかにも『お姫様』っぽい、大きな可愛らしいベッドを映し出している。

そしてもう一つ。そのベッドの横の小さな丸テーブルの上に置かれた、まあるい水晶の玉。

手のひらサイズのその水晶の中心部では、深い緑色の光が禍々しいオーラを放ちながらちかちか光っているのが、遠目からでも分かった。

あのおどろおどろしさ。間違いない。あたしたちの探し求めていた、例のやつだ。

「やっぱり、あれが関係してたのね。ビンゴ…って、人の話を聞けぇ――――――っ！！！」

あたしは刺していた剣を鞘ごと、思いっきりハルの方へ投げる。そいつは綺麗な弧を空中で描くと、ごい～んという音を立ててハルの頭にクリーンヒットした。

「ぶぎゃっ！？」

そのまま崩れ落ちるハル。え、なんでいきなり凶器を投げたのかって？そんなもん決まってる。人の話も聞かず、あたしたちがここに来たそもそもの目的も忘れ、下心満々の顔で姫の眠ると思しきベッドに一目散だったからだ。全く、本当に予想通りの動きをしてくれるやつだ。

「…いたい」

「当たり前でしょう？頭めがけて思いっきり投げつけてやったんだから」

涙目になりながら、床にひれ伏す馬鹿男。あたしはそんなハルの体を全体重をかけて踏みつけながら、水晶の下へ向かう。この世のものとは思えない悲惨なうめき声が聞こえてきたけど、気にしないことにする。

近くでみると、その禍々しさがよく分かる。この世のものとは思えない、いや、この世に存在していてほしくない狂気の魔力を秘めた、恐ろしい水晶だ。これなら、今まで人の手では破れないほどの強力な結界や魔法を作り出せても不思議じゃない。

「…この力は人の手には余るほど、強力で残忍なもの。悪いけど、ここで消えてもらうわ」

そう言うと、あたしは足元に落ちた剣をとると、三度、鞘から引き抜く。そして、水晶の上に構える。

「この魔剣に、封印させてもらう」

剣にはめ込まれた緑の宝玉が、ひと際怪しい光を放つ。

「さあ、ご飯の時間よ魔剣ちゃん。思う存分に喰らいなさい！！」

そしてあたしは思いっきり水晶の上に振り下ろした。途端に、部屋はまばゆい緑色の光に包まれる。水晶にあった光と同じ色。あまりの光の強さに、思わず目を閉じる。でもそれは一瞬のことだった。光は、まるで剣の宝玉に呑みこまれるかのように吸い込めれていき、そして。

消えた。

「……ふぅ」

後に残ったのは、ぱっくりと二つに割れた水晶。そこにはもう、なんの光も映していない。代わりに、あたしのもった魔剣が、その水晶の光を受け継いだかのように全体が揺らめくように光り、…やがてその光も消えた。

「封印完了！」

あたしはそう言うと、剣を元の鞘に収めた。これであたしがここに来た目的は果たせた。あ―、疲れた。

と。

「…おい、今ので例の力封印したんだよなぁ」

いままで床に転がっていたハルが、そのままの状態で声を上げる。っていうか、まだ起き上がってなかったんだ。ちょっと強く踏みすぎたかな。

「まあ、ね。これでもうここの封印は全て解かれたはずよ」

「と、いうことはだ。もしかして、俺の愛するお姫様の封印も…」

「当然、解かれたでしょうね。じきに目を覚ますはずよ」

そう、力がなくなったということは、眠り姫の封印も当然なくなったはず。すると急にハルはがばっと勢いよく立ちあがった。そしてすごい剣幕であたしに詰め寄る。

「なん、なん、なんっでだよ！？俺まだ、麗しい眠り姫の封印を口付けで解いてあげてないのん、なに勝手にさきさき進めちゃうわけ！？俺の楽しみを奪って、そんなに楽しいかよ！？」

…案の定、ここに来た真の目的を忘れてやんの。ま、そんなことだろうとは初めっから思っていたんだけど。

「いいじゃない。あんたの毒牙にお姫様がかからなくって」

「恋が！！それもとびっきり素敵なロマンチックな恋が生まれたかもしれないんだぞ！？自分をキスで目覚めさせてくれた運命の相手との出会い…。それをお前は。お前はぁぁぁ（泣）」

「…そんなこと言ってる間に、そろそろお姫様が目を覚ます頃だと思うんだけど」

「くっ…。せめて、姫様が最初に目覚めたときに、俺が一番に視界に入るようにするぞ！！っていうか、もうこの際何でもいい！！俺が愛の口付けで目を覚まさせたことにしてやるっ！！！」

そうしてハルはくるりと向きを変えると、一目散に姫の眠ると思しきベッドに向かう。愛らしい薄手のレースの天蓋をかき分けると、ちらりと、綺麗な白い腕が見えた。どうやら呪いは解けたらしく、その腕がもそもそと動いている。ハルは急いでその腕をとると、恭しく、白魚のような手に口付けをする。

「姫、お目覚めですか？姫は永い間眠っておられました。それこそ永遠に匹敵する時間を。しかし、もう大丈夫です。この私が姫の悪夢を取り除いてさし上げました。そう、愛の口付けという方法で。さあ、私と一緒に、永遠の愛を……」

？

急にハルが言葉を失う。その手を取ったまま、かちんこちんに固まっている。ここからは固まったハルと白い手しか見えないのでよく状況が分からないんだけど…。

ただどうたらハルは、相手の顔を見て固まったらしい。

どうしたんだろう。もしかして、想像以上に姫様が美しすぎて言葉が出ない、とか？はたまたその逆で、ものすごく、その、美しくなかったとか？

不審に思ったあたしは、天蓋をかき分け、後ろからそっと近づく。

「ねぇ、ハル、一体どうしちゃったの？あんなに会いたがってたお姫様なのに……」

思わず、あたしもハル同様、言葉を失う。そこから見えたお姫様の顔。

真っ白な美しい腕の先にあったのは、想像通り、その手を持つにふさわしい美しい人だった。ふんわりとした金髪の美しい髪。深い海を思わせる、黎明な青い瞳。見る者を魅了する愛らしい、薔薇色のほっぺ。思わず口づけたくなるつやつやした美しい形の唇。まさに、伝説になるほどに美しい、完璧なそのお姿。

ただし、それは女性ではなく男性。彼女、ではなく、彼。

つまり、ベッドに横たわっていたのは、美しいお姫様ではなく、世にも美しい王子様だったのであった。

目覚めた眠り姫

「まあ、３００年前の食文化とは見違えるほど違ってるだろうから、口に合うかは分からないんだけど…。味は保証するわ」

あたしは、目の前のテーブルに所狭しと並べられたお皿を見ながら、彼に話しかける。そのお皿の上には、どれもおいしそうな料理が満タンに盛られている。

「どれなら口に合うか分からなかったから適当に頼んだんだけど。ちょっと頼みすぎたわね」

苦笑しながらそう言うと、

「い、いえ、そんな。僕のために気を遣っていただけて、本当にありがとうございます」

なんて言いながら深々と頭を下げた。

『彼』、とは、目の前に座っている金髪碧眼の彼。名前をウィリアム・ゴードン・スリュートン。あたしたちがさっきお城から拉致ってきた、眠り姫こと眠り王子のことである。

目を覚まさせてあげたはいいものの、本人はここが３００年後の世界だとはにわかには信じられなかったようで（普通はそうだ）、まあとにもかくにも今の街を見せれば、３００年前とは違う時代だって分かってもらえるんじゃないかということで連れだしたのだ。で、ついでにおなかを満たすことも考えて、まっさきに街の食堂へとやってきたのだ。

「本当に、今まで僕のみたことのない料理ばかりで戸惑いますね。

こ、この、体に悪そうな真っ赤な液体？みたいなものは何ですか？」
「ああそれ？それは『マーボウ豆腐』っていって、東国から伝わってきたものよ。赤いのは、唐辛子っていう辛い香辛料が入っているからなの。白いのはお豆腐。ピリ辛で、食べだすと癖になるよ」
「は、はあ。…じゃあちょっと食べてみます！」

そう言うと、ウィリアムはおそるおそる赤いお皿に手を伸ばす。そしてスプーンでひとすくいすると、口の前まで持ってくる。そのまま未知のものをじーっと眺めていたが、やがて意を決したように一気に口の中に流し込んだ。

「！？か、か、辛い…」
「あ、やっぱり辛いよね。それがこの料理の特徴でもありおいしいところなんだけど。やっぱり苦手かな？あ、もし辛かったら、吐きだしてくれてもいい…」
「いえ、大丈夫です。その、想像したことのない辛みだったのでびっくりしたんですが。でも、この味、僕はすごく好きですよ」

そして彼は、今度は嬉しそうに二口、三口と口の中へ入れていく。

「うん、おいしいです！」

それで未知の料理への恐怖心が薄らいだのか、次々にお皿の上の料理に手を伸ばしていく。
なんにせよ、おいしいって言ってもらえる料理がってよかった。さて、それじゃああたしもたべようっと♪正直、あのお城探検でかなりおなか減らしたんだよねぇ。誰かさんが役立たずなせいで。あたしは一番にエビのチリソースに箸を伸ばす。う～ん、海老がプリップリ♪ここの料理人、いい腕してる～！！

「あ、このしろいものは何ですか？」
「あー生き返る。…ん？あ、これは、肉まんっていうの。外がふわふわのおまんじゅうみたいなもので、中に肉汁滴る豚肉が入っているの。え、その茶色いのはからあげ。鶏肉に衣をつけて油で揚げたもの」
「わぁぁ、外はサックリで、中はジューシーですね。こんなの初めてです」
「そうね。このへんにある料理は、全部東国から２００年ほど前に伝わってきたものだって言われてるから、ウィリアム王子の時代にはなくても不思議じゃないか」
「僕が食べたことあるものは、すくなくともここの食卓にはないです。へぇ、こんなおいしいものがいっぱいあるんですね」
「そうそう。ほら、遠慮しないでいっぱい食べてね。二人じゃ食べきれないぐらいの量頼んじゃったし」
「はぁ。……あ、あの、さっきから気になっていたんですけど」
「ああ気にしなくていいからあんな馬鹿」
「そう言われても、その、えと…」

王子が口ごもりながら、気遣うような視線をあたしに…違う、あたしの後ろの壁に送る。

「ハルさんも、こっちに来て一緒に食べましょうよ…？」

心やさしい王子様は、あんなみの虫以下の変態最強勘違い男にも声をかけてくれる。心の広いお方だ。あんなことされて、盛大な勘違いをされて、笑って許してくれるなんて。あたしが王子の立場なら、ぐうの音も出ないほど殴り飛ばして、半殺し以上全殺し未満にしてやるのに。
そんな、広い器を持った王子様に、これ以上余計な気を遣わせるのは申し訳ないので、あたしは後ろを向くと、隅っこで遠い国に意識

を飛ばしている相棒を呼ぶ。

「ちょっとハル！いい加減こっちの世界に戻ってきてよね。うっとおしいんだけど」

眠り姫に口づけをすることを生きがいとして城まで行き、あたしにさっさと眠りの封印を解かれた上、男だという事実に気がつかないまま恭しくカッコつけてウィリアム王子の手に口付けをし、愛を囁いたお間抜けハル。奴はその事実に気付くと、あまりのショックに、なんか小さな声でぶつぶつ呟きながら、放心状態になってしまったのだ。

「俺の、美しき眠り姫との感動的なシーン…。男、男、男。俺は男を口説こうとしていたのか…？愚かな」

…いつものハルもうっとおしいけど、今のハルはそれに7重の輪をかけて更にうっとおしく、いらっとする。だからあえて視界にはいれないようにしていたんだけど、いつまでもあんな不抜けた状態じゃこれから困る。あたしはしぶしぶ席を立つと、ハルに詰め寄る。

「もう、終わったことをくよくよしたって、仕方ないでしょう！？ウィリアム王子は笑って許してくれたし、それでいいじゃない」

するとハルはどんよりとした表情で、

「もう、俺の人生おしまいだ…。眠り姫との愛だけを頼りにここまで生をつないできたっていうのに、その望みが断たれた今、俺には生きている意味なんて一ミクロンもない…！」

イラッ！！

もう、我慢の限界だ…。言っとくけど、あたしのハルへのイラッとする沸点はかなり低い（だからその度に日常的に殴ったり蹴ったり刻んだりしてるんだけど）。そんなあたしだけど、今回のことは勘違いにしよ少しはかわいそうだな、と思って（自業自得だけど）、何も攻撃せず、何も言わず、街まで連れてきて、ご飯まで用意してやったのだ。

なのに、このあほんだらときたら……！！

じゃあいっそお望み通り、1ミクロンに刻んでやろうか…そう思って、あたしはゆっくりと剣に手をかける。

と。

「お、ミーナちゃん、今日も可愛いね♪」

「やだ、ジュークさんったら、いつも口が上手なんだから」

このお店のウェイトレスの女性が、奥から出てきてカウンターのお客さんと会話をしているのが聞こえた。別に意識した訳じゃないけど、妙に甲高い声だから耳についたのだ。こう、なんか、きゃぴっとしたような、甘えたようなような、女の子女の子した声。さっきまではいなかったから、多分ずっと今まで裏にいたんだろう。まあウェイトレスは今はどうでもいいや。それよりこの屍のようなハルをなんとかしないとって、あれ！？

さっきまで胸ぐらをつかんでいたはずのハルが、消えていた。

「あれ？あいつどこ行ったの？」

あわてて周りを見渡す。するとウィリアムが遠慮がちな声でカウンターを指さしてきた。

「あ、あのぉ、ハルさんだったら、あそこに…」

そこにいたのは、例のきゃぴっとした声にふさわしい、きゃぴっとした可愛らしいウェイトレスさんと、その足元に跪く、ハル。彼は潤んだ瞳で彼女を見つめると、情熱的な口調で彼女に愛を囁きかける。

「君のその声が、俺をこの世に引き止めてくれた。俺は、今この瞬間に、君と出会うために生まれてきたんだと確信したよ」

「まあ！！！」

ハルの真剣な愛の告白に、思わず赤面してほほ笑む彼女。あらら、目がハートマークになってやんの。

「っていうか、さっきまでの死にかけはどこ行った…」

今にもこの世から消えてしまいそうなほど、意気消沈していたのに、可愛い女の子を見つけた途端、これだ。いつものハル。あまりの馬鹿馬鹿しさに、あたしは怒る気にもなれず、深いため息をつきながら席に戻った。

「ま、さっきみたいに暗くてうっとおしいオーラを出されているよりは、１００倍ましか」

「それにしても、ハルさん、すごかったですよ。あそこからウェイトレスさんがいたところまで１５メートルはあるのに、一瞬で瞬間移動していました…」

驚きの表情で、ウィリアムがハルを見つめる。
あたしは食べかけだったちんじゃおろーすに手をかけると、しみじみと呟いた。

「あいつの女好きは、天性のものだからね。瞬間移動なんて訳ないわ…」

それにしても懲りない男である。もうあいつのことは放っておこう。心底思う。

「王子も。あんな奴だから、気にしないで。もう放っておきましょう」
「はあ、そう、ですね」
「そうそう、心配するのがあほらしくなるわよ」

と、いう訳で、あたしたちはそれからハルのことは一切話題に出さず、2人、和やかに食事を続けていた。するとしばらくして、上機嫌なハルがスキップしながらこっちにやってきた。

「いやぁ、あの子、キャスリンちゃん、っていうんだけどさ。めっちゃ可愛いよなぁ〜。ここで働き始めてまだ1カ月らしいんだけど、そのういういしさもたまんないよなぁぁ♪」

そして、何食わぬ顔で席に着く。

「まだ少女のようなあどけなさをのこしつつ、大人への階段を上る途中の彼女がさなぎから蝶になるお手伝いを俺がぶぎゅうきがぁぁぁっ！！！！！！」

話の途中で、突然ハルが椅子ごとあらぬ方向へ吹っ飛んでいく。な

んか椅子と人間の頭が固い壁にめり込んだような音が聞こえてきたけど、まあ気にしない。もくもくと、あたしは料理を消費していく。するとハルがすごい剣幕であたしに詰め寄ってくる。

「ってをい！？いきなり何すんだよてめぇ！？」

「え、何が」

「何が、じゃねぇだろうが！！人の座ってた椅子ごと足で蹴り飛ばしやがって。おかげで痛い目見たじゃないか」

「いや、なんかしれっと席についてご飯食べるあんたにむかっときて」

まあでも、いまのでちょっとすっきりしたかも。あたしはハルの頭にできた巨大なこぶを見つめながらそう思う。ふふ、いいざまだ。二枚目も台無し。

「…ま、いいさもう。いつものことだしな」

あたしに抗議しても無駄だと悟ったのか、ハルは吹っ飛ばされた椅子をもう一度元の場所に戻すと、よっこらせと座った。

「え、今のって、よくあることなんですか！？」

今まで静かにあたしたちを見ていたウィリアムが、驚愕の表情を浮かべながら言葉を並べる。

「ああ、よくあることだ。俺のやることなすこと気に食わないのか、毎日何回も俺に攻撃してくるんだよ、この暴力女は」

「ちょっと！！あたしが一方的に悪い、みたいな言い方やめてよね！」

「いいや、お前が悪い！！大体俺が、お前に直接迷惑かけたことあ

ったかよ！？」
「よくそんなことが言えるわね。大体あんたの尻拭いしてんの、あたしでしょうが！？
…って、ちょい待ち。今はそんなことおいとこうじゃないのよ」
うっかりいつもの感じでハルと言い争いになるところだった。そもそも、あたしたちがこの街に来た目的は、だ。
強力な封印を作りだした魔法の力を回収し、ついでにその力によって眠らされた、３００年前のお姫様を救出することだった。そして今、その目的は果たされたのだ。まあ眠っていたのがお姫様じゃあなくて王子様だったっていう違いはあるにしろ、果たされたからいい。そしてその肝心の王子様は、あたしたちの目の前に座っている。そして物珍しそうに鳥のからあげを噛みしめていた。
「で。こうして大馬鹿野郎のハルもこの世に復活したことだし、そろそろ本題といこうじゃない。…この世界があなたの生きていた世界の３００年後のものだっていう実感は出来たかしら？」
そう、この飯屋に来たのは、あたしたちの空腹を満たすためっていうのと、目覚めたばかりの王子様に、とりあえず、現状を知ってもらいためだった。だからわざわざ、彼の生きていた時代にはなかったと思われる、料理をそろえた専門店にまで足を運んだのだ。すると王子は箸を止め、何かを噛みしめるようにゆっくりと、言葉を紡いだ。
「そう、ですね。少なくとも、街の雰囲気や料理の感じを見た限りでは、僕の生きていた時代とはかなり違うというのは分かります。とはいえ、まだ実感はそんなにわかないんですが」
「あら、ずいぶんすんなり受け入れるのね」

普通、目覚めたばかりの時に、今はあなたの生きていた時代から３００年経った世界です、とか言われたらなかなか納得できないし、理解するのに時間がかかるもんだと思うけど、彼は思ったよりも早く理解したらしい。

「これだけ今までとは違ったものを見せられたら、さすがにそれを否定できませんよ。実際、僕の眠っていたお城は記憶にあったものよりも古びて、今にも朽ち果てそうになっていましたから」

そう言うと、複雑そうな顔で苦笑する。

「心のどこかでは信じたくないと思ってはいますが…。こればかりは仕方がないですね」

「……なあ、話の腰を折るようで悪いんだけどよ」

口を挟んだのは、ハル。一人、今の状況を理解できていないような？マークいっぱいの顔で、ウィリアムの方をまじまじと見つめている。

「今気付いたんだけど、こいつってもしかして、さっきの眠り王子？」

…傍にいたはずの男が今更、何を寝ぼけたこと言ってんだ。と、いうことなかれ。なんせこの男、さっきのさっきまで、頭の回線がショートした廃人だったのだ。つまり、あたしたちの会話とかなんやらそういうもん、全然聞いてなかった訳で。

「……ま、あの状態のあんただったら仕方ないか。いいハル、よく聞いて。彼の名はウィリアム・ゼボン・スリュートン。この地を治

めていた、スリュートン家の血をひく、れっきとした王子様よ」
「あ、改めて、どうもです。ウィリアムです。先ほどの目覚めの時はどうも」

ウィリアムはあわてて、ハルにぺこりとお辞儀をする。先ほど、とは、言うまでもない。ハルが彼を女と勘違いして（以下略）のあれだ。するとハルはバツの悪そうな顔で頭をかくと、

「あ――――、その、なんだ。さっきのは忘れてくれ。できればあの勘違いのくだりは墓場まで持っていきたいぐらいだから」

まあ、そうだろうなぁ。恥ずかしいもほどがあるもんね。

「とにかく話を進めるわよ」

ハルの個人的な恥ずべき過去はおいといて。あたしは話し続ける。

「それでウィリアム王子、目覚めたのはいいんだけど、この世界が彼の生きていた時代から３００年後の世界だっていうことが納得できないって言ったの」

そう、あの時目覚めた王子は、まず、状況ができていなかったようで、手をとったまま石化した見知らぬハルとあたしの姿を見て、びっくりしていた。とりあえずあたしは、固まったまんまだったハルの体を王子様から無理やり引き離すと、今の状況を細かく説明した。

「でも、目が覚めていきなり、『あなたは３００年間眠り続けていたんですよ』って言われても、普通は納得できないでしょ？実際ウィリアムもそうだった」

あたしの話はきちんと聞いてくれた。でもやっぱり信じられないといった様子で困惑していた。

「なんにせよ、お城の中で話してても始まらないし、実際に外に出て、街の感じとかが彼の生きていた時代とは違うっていうことを知ってもらおうと思って。それでここまで連れてきたの。ついでに腹ごしらえも兼ねて、ね」

とはいえ、彼の目覚めたそのままの姿で街には行けなかった。なぜかは詳しくまだ聞いてないから分かんないけど、彼は今まで寝ていたベッドとよく似た、可愛らしいふりふりのドレスを着ていたのだ。しかも今の時代の服の作りではない。それこそ、おとぎ話に出てくるような古いドレス。

「勝手ながらあんたの服を漁って着せたの。さすがにあたしの服を貸すわけにもいかないし」

ドレスを着て眠っていた彼だったけど、そのことを指摘した時の慌てぶりとかから見て、そういう趣味があって好んで着ていた訳じゃあなかったみたいだった。ので、男物のこいつの服を拝借したのだ。

「なるほど。どうりで見覚えのある服なわけだ。俺の服だったんだな」

「そういうこと。…で？今までの感想とか、そろそろ聞きたいんだけど」

あたしは、今まで静かにあたしたちの話を聞いていたウィリアムに話をふる。

「そうですね…」

彼はどこか困ったような表情を浮かべながら、それでもどこか納得

した感じで答えた。

「ここまで自分の知らないものであふれる世界を見せつけられて、信じないわけにはいかないですね。それに、まるで廃墟のようなお城を見た瞬間、薄々納得していたんです。ああ、僕は確かに３００年もの長い間、ここで眠っていたんだなって」

「そうよ、あなたは３００年もの間、眠り続けていた。そしてその間にあなたのこの話は伝承となり、人々によって風の噂となって世界中に広まったわ。悲劇のおとぎ話『眠り姫』としてね」

「あ、そうそう、それだよ！！！」

突然ハルが立ち上がる。あまりの勢いのよさに、座っていた椅子がごとんと床に転がる。

「ちょっと、なにいきなり興奮してんのよ…」

「いやだってさ、俺たちは『眠り姫』の伝説を聞いて、この街にやってきた。なのに、実際にそこにいたのは、お姫様が眠っていそうな少女趣味のベッドの上に横たわる、ドレスを着た男、お前だっただろ？なんでそんなことになるんだよ。っていうかそもそもお前は、なんでそんな恰好して寝てたんだ？」

確かに。あたしも王子様の衣装を見たときは思わず、しかも大きな声でぎゃあっ、とか言ってしまったんだけど。なんせ顔が中世的で可愛らしいから、女の子と間違えてもおかしくないし、そんな可愛い顔だから、女物もよく似合う。色も白いし、華奢な感じ。なんせあのハルが男だって気付かなかったくらいだ。そういう趣味に走ったとしてもおかしくない。

するとウィリアムははにかむように

「はあ、それはもちろん、僕にそういう趣味があった、という訳ではありませんよ？アイリーンさんにもさんざん突っ込まれましたが」
「あはは、ごめんごめん。あまりに違和感がなかったから、ついからかっちゃった」

別に気にしてませんよ。ウィリアムはあたしにそんなニュアンスで笑いかける。その顔があまりに綺麗だったから、思わず顔を赤らめる。

…その笑顔は不意打ちだと思う。

いきなり顔を赤くしたあたしに、ウィリアムは不思議そうな眼をしたが、あたしは構わず先を話すよう促す。

そして彼は、今までのことをとつとつと語り始めた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1476z/

勇者と魔術師のぶらり世界旅行

2011年12月5日22時53分発行